

JES NEWS

日本評価学会学会報第4号

2022年11月17日発行

【編集】日本評価学会出版・広報委員会

【発行責任者】南島和久

連絡先: jes.info@evaluationjp.org

Contents

I 巻頭言「私と評価」	齊藤貴浩 ……	1
II 第23回全国大会のお知らせ	企画委員会 ……	2
III 『日本評価研究』の最新刊	編集委員会 ……	7
IV 第30期評価士養成講座 開催報告	研修委員会 ……	8
V 書籍の紹介	米原あき ……	9
VI 評価の実践	小林信行 ……	10
VII 編集後記	佐藤 徹 ……	11

I 巻頭言 「私と評価～全国大会での情報交換へのお誘い～」

日本評価学会副会長 齊藤 貴浩 (大阪大学教授)

全国大会に向けて、みなさまご準備をされていること
と思います。今年度の第23回全国大会は12月10日、
11日に日本社会事業大学の主催(贄川大会実行委員
長)によりオンラインで行われます。本学会は「評価」と
いう言葉のもとにあらゆる分野の方が集まっているため、
企画委員会が全国大会のプログラムを組み、発表要旨
集録を作成し、大会実行委員会が当日の運営を行うこ
とになっています。企画委員会の皆様、そして大会に関
係するすべての方々に心よりの感謝を申し上げます。

さて、私が日本評価学会に携わったのは、2000年9
月の本学会の設立まもなくの時期に、第1回全国大会
実行委員会の事務局長としてでした。当時、私の上司で
あった牟田博光先生(元会長)より今年度中に全国大会
を行うと言われたのが11月。大会案内を12月8日に
発出し、発表要旨集録の原稿提出が1月末、そして2月
17日、18日に大会を開催するという、準備期間3ヶ月
のかなり無茶な日程でした。それでも30の自由論題で
の発表、4つの共通論題セッション、1つのシンポジウム

が行われたことは、当時
既に評価に関する研究や
実践が蓄積されていたこと
を物語ります。その後、私
自身は第15回の全国大
会(大阪大学)では実行委
員長として、昨年と今年
は企画委員長として全国
大会に携わりました。現在の



発表要旨集録のデザインなどは第1回と基本的に同じ
であり、少なくとも私が作成したファイルは長く評価学会
に貢献してきたのではないかと思います。

さかのぼって、私の評価との関わりは1992年、私が
東工大の牟田研究室に所属したときからとなります。そ
の頃には評価学とは呼んでいませんでしたが、その内
容は間違いなくプログラム評価でした。ゼミで教わった
費用効果分析をはじめ、大学院生の時から従事させて
いただいたODA評価の経験は、今でも私の研究の根

幹となっています。そして、私は 2000 年に大学評価・学位授与機構に異動し、新たに導入された第三者による大学評価に従事することになりました。日本の大学評価は、先行する外国の大学評価を追うことから始まりましたが、評価にはスクリヴェンのような教育学の系譜もあり、明示的でなくとも教育評価や学校評価と共通点が多く、それまで評価で用いていた概念はほとんどそのまま援用することができました。

現在、公的に行われている学校評価や大学評価は、いわゆるプログラム評価とは異なっていると見られがちです。参加する人(生徒・学生)の個人差が大きく、外部要因が大きく、成果が把握しづらく、必ずしもロジックモデルで期待された成果が出るとは限りません。そのため、結果としてよい活動を行う組織を高く評価するという組織評価になっています。しかし、国民に教育を提供し、知識、技能、態度、あるいは能力を高め、社会での活躍を期待するという行為は、国が新しい社会に対応するための社会的介入に他なりません。私たちのほぼ全員が

教育を同じように経験しているためにそう捉えられないだけなのです。昨今、大学のガバナンスが着目されていますが、継続的な改善によってよりよい教育サービスを常に提供しようとする内部質保証の活動は、発展的評価と通底する概念だと考えています。

評価は、あらゆる事柄を包含します。私たちの日常生活は評価の蓄積です。だからこそ、日本評価学会は「評価」という名のもとに、評価に関連するあらゆる事柄や事例を取り込んでいけるのではないかと考えています。自らの分野のみならず、分野を問わずに様々な事象や経験に触れ、知的刺激を受けることこそが評価学会の醍醐味なのではないでしょうか。全国大会と分科会の集まりは、そのような情報交換の良い機会です。会員のみなさまの活発なご参加を期待いたします。そして最後に、日本評価学会が常に発展し、よりよい成果を出し続ける(内部質保証のできている)組織となること、そして私たちの評価を通じた貢献によって、社会がより良くなることを期待いたします。

II 第23回全国大会のお知らせ

2022年12月10日(土)、11日(日)の日程で第23回全国大会をオンラインで開催します。大会のテーマは「活用される評価に向けて」です。ふるってご参加ください。

12/10	ルーム①	ルーム②	ルーム③
午前の部 10:00-12:00	自由1「行政」 (南島和久)	共通1「価値判断のあり方」 (佐々木亮)	自由2「地域・社会福祉」 (小島卓弥)
午後の部Ⅰ 13:00-15:00		共通2「国際協力機構(JICA)の事業評価の最新の取組」 (佐藤真司)	共通3「社会的インパクト評価の概念と実践」 (今田克司)
午後の部Ⅱ 15:30-17:30	共通4「科学技術評価のこれまでとこれから」 (白川展之)		共通5「発展的評価の可能性と価値共創主体としての評価者の役割」 (千葉直紀)

12/11	ルーム①	ルーム②	ルーム③
午前の部 9:00-11:00	シンポジウム「社会的課題解決のイノベーションに有効な形式的評価のあり方」 (贇川信幸)		
11:10-12:00	理事会		
12:15-13:15	総会		
午後の部Ⅰ 13:30-15:30	共通6「政策形成・評価の在り方に関する改革の動向」 (北岸英敏)	ラウンドテーブル1「学校評価を問い直す」 (佐々木保孝)	自由3「評価手法」 (米原あき)
午後の部Ⅱ 16:00-18:00	共通7「自治体評価における活用」 (窪田好男)	自由4「教育・国際」 (佐々木保孝)	ラウンドテーブル2「評価倫理ガイドラインの利用及び改定」 (小林信行)

1日目(12月10日(土))

AM 10:00～12:00 午前の部

ルーム①

自由論題1：行政

座長・討論者：南島和久（龍谷大学）

- ・村上裕一（北海道大学）「原子力行政機関の独立性を評価する」
- ・飯田洋市（公立諏訪東京理科大学）「地方自治体における異なる施策下の事業の相対評価手法の研究」
- ・山谷清志（同志社大学）「行政統制と評価の再検討ー比較政策評価論から」
- ・野呂高樹（公益財団法人未来工学研究所）「欧州連合（EU）における Horizon Europe のモニタリングに関する一考察ー「Key Impact Pathways」に着目してー」

ルーム②

共通論題1：価値判断のあり方 - No value, no evaluation-

座長・司会：佐々木亮（国際開発センター）

討論者：津崎たから（ウェスタンミシガン大学大学院）、大関智史（旭川医科大学）

- ・Jane Davidson (Real Evaluation) “The critical role of values and evaluative reasoning in actionable evaluation.”
- ・Takara TSUZAKI (Western Michigan University) “Value Judgment in Changing Time: from value judgment to development”
- ・大関智史（旭川医科大学）「評価の実践における評価論理に関する考察～米国評価学会員へのアンケート調査分析から～」
- ・Ryo SASAKI (International Development Center of Japan) “Short history of “Value” Trunk at Alkin’s Evaluation Tree”

ルーム③

<p>自由論題 2：地域・社会福祉</p> <p>座長：小島卓弥（NTT データ経営研究所）</p> <p>討論者：源由理子（明治大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○白井博隆（麗澤大学大学院）、加藤郁夫（あしがら地域振興協会）、竹内正興（国際開発センター）「企業活動が及ぼす地域振興への影響の評価－北海道乙部町における株式会社アドバンスの事例－」 ○小野田由実子（法政大学大学院）、新藤健太（日本社会事業大学）、磯谷悠子（東北医科薬科大学病院）、大島巖（東北福祉大学）「社会課題解決のための変革プログラムに取り組む実施主体の効果的組織発展に資する評価情報提供のあり方：CD-TEP 法を用いた事業評価の経験から」 ○新藤健太（日本社会事業大学）、西岡正次（A'ワーク創造館（大阪地域職業訓練センター））、小田川華子、池本修悟（ユニバーサル志縁センター）、小野田由実子（法政大学大学院）、大山早紀子（川崎医療福祉大学）、大島巖（東北福祉大学）「生活困窮者等の効果的な就労支援のための効果モデルの検討～プログラム理論の組織計画に注目して～」
12:00～13:00 休憩
PM1 13:00～15:00 午後の部 I
ルーム②
<p>共通論題 2：国際協力機構（JICA）の事業評価の最新の取組について</p> <p>座長・司会：佐藤真司（JICA）</p> <p>討論者：正木朋也（JICA）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古田成樹（JICA）「JICA の事業評価の概要－最近の評価制度改善の取組とデータ利活用の状況－」 ・田村愛弥（JICA）「世銀 SWIFT を活用した高頻度家計調査による事業モニタリング・評価～マラウイ国における実践紹介」 ・佐藤功一（JICA）「JICA 事後評価における衛星データの活用」
ルーム③
<p>共通論題 3：社会的インパクト評価の概念と実践</p> <p>座長・司会：今田克司（CSO ネットワーク／ブルーマーブルジャパン）</p> <p>討論者：津富宏（静岡県立大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今田克司（CSO ネットワーク／ブルーマーブルジャパン）「趣旨説明：社会的インパクト評価の概念整理」 ・平田みずほ（新生銀行）「インパクト投融資におけるインパクト測定・マネジメント（IMM）の進化と現在地」 ・小笠原由佳（社会変革推進財団）「休眠預金等活用事業における社会的インパクト評価の実際と課題」 ・○大澤望（インパクト・マネジメント・ラボ）、新藤健太（日本社会事業大学）「社会的インパクト・マネジメントにおける社会的インパクト評価の機能」
PM2 15:30～17:30 午後の部 II
ルーム①
<p>共通論題 4：科学技術評価のこれまでとこれから：日本の評価学への期待</p> <p>座長・司会：白川展之（新潟大学）</p> <p>討論者：南島和久（龍谷大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・塩満典子（山口東京理科大学）「科学技術と評価～体験的研究評価論～」 ・黒河昭雄（神奈川県立保健福祉大学）「科学技術イノベーション政策と EBPM」 ・齊藤貴浩（大阪大学）「大学評価と研究評価：日本の大学の対応」 ・白川展之（新潟大学）「日本評価学会科学技術評価分科会が目指すもの」
ルーム③

<p>共通論題 5：発展的評価の可能性と価値共創主体としての評価者の役割 座長・司会：千葉直紀（ブルーマーブルジャパン） 討論者：米原あき（東洋大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中谷美南子（評価コンサルタント）「発展的評価(DE)から見た評価者の役割と実践（概論）」 ・小澤伊久美（国際基督教大学）「発展的評価から見た評価者の役割と実践（教育分野において）」 ・清水潤子（武蔵野大学）「発展的評価とコレクティブ・インパクトー共通基盤と課題整理の試みー」 ・○今田克司（CSO ネットワーク）、○松村幸裕子（共奏学舎）「価値共創主体としての評価者に求められる役割～『A Developmental Evaluation Companion』から～」
2 日目(12 月 11 日(日))
9:00～11:00 シンポジウム
ルーム①
<p>シンポジウム：社会的課題解決のイノベーションに有効な形成的評価のあり方 ～活用される評価へのアプローチ</p> <p>座長：贅川信幸（日本社会事業大学） 討論者：北大路信郷（明治大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大島巖（東北福祉大学）「社会課題解決に資する有効な EBP 等効果モデルの形成的評価～実践家参画型評価を用いたアプローチの可能性～」 ・今田克司（CSO ネットワーク）「実用重視評価の到達点 ～発展的評価によるイノベーター伴走と社会課題解決～」 ・源由理子（明治大学）「参加型評価における形成的評価の役割 ～組織における評価文化醸成への期待～」
11:10～12:00 理事会
12:15～13:15 総会
PM1 13:30～15:30 午後の部 I
ルーム①
<p>共通論題 6：政策形成・評価の在り方に関する改革の動向 ～「役に立つ」評価を目指して～</p> <p>座長・司会：北岸英敏（総務省） 討論者：南島和久（龍谷大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・辻寛起（総務省）「政府における政策形成・評価をめぐる議論の最新動向」 ・菊池明宏（総務省）「政府における EBPM 推進の取組～EBPM の実証的共同研究を中心に」
ルーム②
<p>ラウンドテーブル 1：学校評価を問い直す ～多様な支援者からみた学校づくりの実際をふまえて～</p> <p>座長：佐々木保孝（天理大学） 司会・討論者：小澤伊久美（国際基督教大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・菊池由利（奈良市教育委員会）、高橋雅代（生駒市立あすか野小学校）、新谷明美（奈良市富雄中学校区地域教育協議会）、佐々木保孝（天理大学）「現場で感じる「評価」の潜在的可能性ー奈良県内の「地域とともにある学校づくり」の取り組みよりー」 ・石田健一、橋本昭彦（日本女子大学）「学校支援活動にみられる当事者の「学び」ー学びのサイクルを駆動させる評価のポイント」

<p>ルーム③</p> <p>自由論題 3：評価手法</p> <p>座長：米原あき（東洋大学）</p> <p>討論者：青柳恵太郎（メトリクスワークコンサルタンツ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○竹丸草子（長岡造形大学大学院）、新藤健太（日本社会事業大学）「福祉事業所でのアーティストワークショップにおける MSC 手法の試み」 ・本田正美（関東学院大学）「特定個人情報保護評価における「評価」とは」 ・田中博（参加型評価センター）「参加型・質的評価手法 MSC（モスト・シグニフィカント・チェンジ）による演劇ワークショップ評価の試み」 ・赤澤直樹（広島大学大学院）「インパクト理論における Equivocality の考察」
<p>PM2 16:00～18:00 午後の部 II</p>
<p>ルーム①</p> <p>共通論題 7：自治体評価における評価の活用－評価の活用における制度の重要性－</p> <p>座長・司会：窪田好男（京都府立大学）</p> <p>討論者：池田葉月（京都府立大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田中啓（静岡文化芸術大学）「評価の利用につながる制度化のあり方：自治体の評価制度をめぐる論点の整理」 ・小野達也（鳥取大学）「業績測定による評価における活用－測定結果は活用するに足りるのか－」 ・佐藤徹（高崎経済大学）「地方自治体における政策評価と EBPM の一体的推進に関する考察」 ・小島卓弥（NTT データ経営研究所）「地方自治体における行政評価制度の現状とこれから」
<p>ルーム②</p> <p>自由論題 4：教育・国際</p> <p>座長：佐々木保孝（天理大学）</p> <p>討論者：西村邦雄（東洋学園大学非常勤講師）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○牟田博光、橋本和明、山田祐美子、結城貴子（国際開発センター）「「教育協力政策の評価」の評価手法」 ・橋本昭彦（日本女子大学）「公立小中学校における学校評価の実施環境と評価ニーズの調査とその結果～学校評価のカスタマイズ手法の開発（2）」 ・石田健一「インフラ開発事業の環境社会配慮モニタリングにおける可能性－地域の人たちによる学習を見据えて」 ・高橋真美（元早稲田大学大学院）「持続性の評価の研究」
<p>ルーム③</p> <p>ラウンドテーブル 2：日本評価学会「評価倫理ガイドライン」の利用及び改定に関する 会員意見交換会</p> <p>座長：小林信行（OPMAC 株式会社）</p> <p>司会：中谷美南子（評価コンサルタント）</p> <p>討論者：佐々木亮（国際開発センター）、石田洋子（広島大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小林信行（OPMAC 株式会社）、田中博（参加型評価センター）「「評価倫理ガイドライン」の利用及び改定に関する論点－アンケート調査結果を中心に－」

大会実行委員会 小池康太郎（日本社会事業大学大学院）、白須莉央（日本社会事業大学職員）、新藤健太（日本社会事業大学）、田中啓（静岡文化芸術大学）、玉之内菖（日本社会事業大学大学院）、賛川信幸（日本社会事業大学）（委員長）、仁科雄介（伊東市役所）

企画委員会 小島卓弥（NTT データ経営研究所）、齊藤貴浩（大阪大学）（委員長）、佐々木保孝（天理大学）、渋谷進（大学改革支援・学位授与機構）、白川展之（新潟大学）、田中啓（静岡文化芸術大学）、南島和久（龍谷大学）、正木朋也（国際協力機構）、米原あき（東洋大学）

III 『日本評価研究』の最新刊

編集委員長 西野 桂子(関西学院大学)

2022年9月に『日本評価研究』の最新刊(22巻2号)が発行されました。今回は「イノベーション」の形成的評価」という特集を組んでいます。

『日本評価研究』は、発行後速やかに会員のみなさまのお手元に届くよう手配をしております。ただし、年会費未納の方には送付しておりませんので、お手元に届かないようでしたら学会事務局 (jes.info@evaluationjp.org) までお問い合わせください。

また、送付先が変更になった場合は学会事務局までご連絡をお願いします。変更届は学会のホームページのトップにあります。



■もくじ

特集:「イノベーション」の形成的評価

特集に寄せて「有効な形成的評価アプローチ法の発展のために」 大島巖

対人サービスのイノベーションを EBP プログラムに発展させる形成的評価法の開発

— CD-TEP 法を用いた実践家・当事者参画型エンパワメント評価の可能性 —

大島巖 新藤健太 源由理子

教育分野における参加型形成的評価の位置付けと意義 米原あき

社会的インパクト評価の系譜 — マネジメント支援のための評価への進化 — 今田克司

対人サービスにおけるイノベーションをエビデンスに基づく実践プログラムに発展

させるための英国の取組み — 児童福祉分野の What Works Centre を中心に — 家子直幸

現場実践を効果モデルに発展させる評価ガイドの開発と実装

— CD-TEP 法を活用した事例の考察 — 清水潤子 新藤健太

実践家参画型エンパワメント評価の基盤を支える「EBP 効果モデル」技術支援

センターの意義と役割 — 評価キャパシティ形成に向けた役割を中心に — 新藤健太 大島巖

研究論文

自治体会計情報のオープンデータ化の促進

— 国際基準 COFOG による費目分類に着目して — 生方裕一 佐藤亨 川島宏一

「より良い規制」のための評価システムの条件 村上裕一

研究ノート

業績測定による評価における指標の質改善のための帰納的情報の必要性 池田葉月

ウランバートル市の大気汚染対策の政策評価

— ロジックモデルの観点から — オンドラハ バトホヤグ

大学の地域貢献プログラムに質改善を目的とした評価を行うことの意義 岸本由梨枝

第 23 回全国大会のご案内

「日本評価研究」への投稿を募集しています！

日本評価学会では、「日本評価研究」掲載のための投稿原稿を募集しております。投稿の締め切りは 9 月末日(翌年 3 月刊行)及び 3 月末日(9 月刊行)です。ご興味をお持ちの方は投稿規定・執筆要領・査読要領、並びに原稿見本をご参照のうえ、奮ってご投稿ください。ご投稿の際は、投稿申請書をご提出ください。原稿作成の際は以下の URL の「原稿見本」を利用して作成をお願いします。

学会誌ウェブサイト <http://evaluationjp.org/activity/journal.html#recruitment>

IV 第 30 期評価士養成講座 開催報告

研修委員長 今田 克司((一財)CSO ネットワーク)

第 30 期評価士養成講座は、オンデマンド&オンラインによる開催で、40 名様の参加を得て実施しました。第 27 期開講(昨年 2-3 月)よりオンデマンド&オンライン方式にシフトした評価士養成講座、この方式での 4 回目の開講になります。また、会員アンケートや理事会での討議を経て、今期より、よりプログラム評価を中心に据える講座内容に改変しています。評価にまつわる世の中の動きの中で、本講座の受講希望者の数も増え、関心層も広がっています。日本評価学会では、講座を継続していくとともに、講座内容や評価士制度を更新して社会のニーズに的確に応えていくことを検討中です。

■開催概要

◇講座 2022 年 8 月 13 日(土)~9 月 11 日(日)

- ①オリエンテーション(Zoom)への参加 2022/8/13(土)10:00-11:00
- ②講義録画の視聴 2022/8/13(土)~9/18(日)(期間限定、認定試験日まで視聴可)
- ③演習・質疑応答オンラインセッション(Zoom)への参加
2022/8/27(土)、8/28(日)、9/3(土)、9/4(日)、9/10(土)、9/11(日)

◇評価士認定試験 2022 年 9 月 18 日(日)* 会場での実施、講座修了者のうち希望者のみ。

『第 30 期評価士養成講座』プログラム						
単元	講義名	講師名	演習・質疑応答オンラインセッション日時			
	オリエンテーション、自己紹介	事務局	8/13	土	10:00-11:00	
第 1 単元 講座の概要と 評価の基礎	① 講座の概要と評価の基本的考え方	今田克司	8/27	土	10:00-11:00 質疑応答	
	② 評価者倫理と評価者の社会的責任	小林信行			11:15-12:15 質疑応答	
第 2 単元 プログラム評 価の基礎と諸 要素	③ プログラム評価の基礎	佐々木亮	8/28	日	13:00-14:00 質疑応答	
	④ プログラム評価の 5 階層 (ニーズ評価)	下園美保子			10:00-11:00 演習	
	⑤ プログラム評価の 5 階層 (セオリー評価)	源由理子			11:00-12:00 質疑応答	
					13:00-14:00 演習 (グループ A)	
					14:10-15:10 演習 (グループ B)	
					15:20-16:20 質疑応答	
	⑥ プログラム評価の 5 階層 (プロセス評価・アウトカム評価)	新藤健太	9/3	土	10:00-11:00 演習	
	⑦ データ収集・分析(定性的手法)	三好崇弘			11:00-12:00 質疑応答	
	⑧ プログラム評価の 5 階層 (インパクト評価)	津富宏	9/4	日	13:00-14:00 演習	
	⑨ データ収集・分析(定量的手法)	下園美保子			10:00-11:00 演習	
	⑩ プログラム評価の 5 階層 (効率性評価)	齊藤貴浩	9/10	土	11:00-12:00 質疑応答	
⑪ 評価可能性アセスメント	中谷美南子	13:00-14:00 演習				
⑫ 評価結果の報告と活用	大島巖	9/11	日	14:00-15:00 質疑応答		
第 3 単元 評価結果の 報告と活用	⑬ 政府における評価の現状と課題	南島和久	オンラインセッションはありません			
	⑭ 自治体における評価の現状と課題	田中啓				
	⑮ ODA 評価の現状と課題	中堀宏彰				
第 4 単元 専門分野科目	講座のおさらい・振り返り	今田克司	9/11	日	10:00-11:00 演習	
	事務局連絡	事務局			11:15-12:15 質疑応答	
					12:15-12:30	

第 31 期評価士養成講座は、2023 年 2~3 月、開講予定です。

評価士養成講座ウェブサイト <http://evaluationjp.org/activity/training-pro.html>

V 書籍の紹介

米原あき・佐藤真久・長尾眞文編 『SDGs 時代の評価:価値を引き出し、変容を促す営み』
(筑波書房、2022年)

日本評価学会会員・東洋大学 米原あき

はじめに、本稿は、執筆者のひとりとして、本書の出版に込められた意図や出版に至る経緯を含めた紹介文であることをご了承ください。

SDGs 時代、すなわち、不確実性のなかで多様な個人や集団が協働して持続可能な社会を構築することが求められる時代に、必要とされる評価の在り方とは、いかなるものだろうか——本書は、この問いを出発点として著された。評価の対象となる取り組みや、その取り組みを取り巻く社会環境が不確実性を増せば増すほど、また多様性に富めば富むほど、その対象の本質的な価値を問う評価の営みはよりダイナミックで複雑なものになり、そこに関わるステイクホルダーも多様化する。本書は、このようなマニュアル化し難い、発展的・協働的な評価を実践する上でのエッセンスを、様々な角度から言語化することを目指している。

本書は 6 つの章と、各章の鍵概念に具体性を与えるための、実践者による BOX 記事から構成される。『第 1 章 価値を引き出す評価とそのしくみ』では、国際開発評価の変遷を歴史的に概観し、SDGs 時代の評価の特性が測定可能性から評価可能性へシフトしていること、そして評価可能性を高めるために協働型評価の重要性が高まっていることが指摘されている。『第 2 章 持続可能性における評価』では、本書が目指す協働的な評価によって、社会の変容と個人の変容がどのように連動して起こるのか、換言すれば、順応的協働ガバナンスが社会的学習のプロセスとどのように連動しているのかが論じられている。『第 3 章 日本の対アフリカ協力事業の評価』では、国際協力事業のガバナンスと評価に関する分析フレームワークに基づいて、国際協力における協

働パートナーシップの在り方が論じられ、対等な国際パートナーが合同で実施する漸進的・発展的な評価の重要性が指摘されている。『第 4 章 通域的な学び』では、本書の各章で取り上げられている「協働」とそれに伴う「学び」のメカニズムと

して、通域的な学び(translocal learning)と呼ばれる、異なる風土に根差した主体同士の双方向的な学びのモデルが提示されている。『第 5 章 発展的評価を日本の文脈で考える』においては、発展的評価の生みの親であるマイケル・パットン氏によって、発展的評価の日本社会への適用可能性が、日本の社会文化的な文脈に基づいて考察されている。『第 6 章 グローバル課題の解決における評価の役割』では、発展的評価の考え方を地球規模課題に応用した、ブルーマーブル評価(Blue Marble Evaluation)のエッセンスを理解するために不可欠なプリンシプルが概説されている。

SDGs 等に示されるグローバルな価値の影響力が大きくなっていく一方で、私たちの現実生活におけるローカルな多様性や不確実性はますます拡大している。本書の著者たちは、協働と学びに基づく評価という営みが両者の懸け橋となることを信じて、本書が、SDGs 時代、そしてもう目前に迫るポスト SDGs 時代の評価についての議論に、僅かなりとも貢献することを願っている。



VI 評価の実践「評価の現場から：評価倫理について」

日本評価学会会員・OPMAC 株式会社、評価倫理・スタンダード分科会代表 小林信行

コンサルタントとして、評価に従事すると「もやもや」とした思いを常に抱える。例として、ODA 事業の評価におけるフィールドの一日を説明しよう。出発前にインタビュー事項や留意点等をまとめた準備メモを完成させ、フィールドまでの移動中にインタビューを通訳する現地コンサルタントに手順を説明する(但し、メモ通りにインタビューが進むことはまずない)。プロジェクトサイトでは、事業を実施した省庁/機関の政府職員が我々を待っている。サイトに関する説明を受けた後、プロジェクト施設の稼働状況や維持管理に関して質問して、施設を撮影する。

サイト実査の後、受益者である地域住民にインタビューする。フィールドでの短い時間を有効に活用したいが、インタビューを断られることもある。「忙しいので、協力できない」と住民に言われた後で、その家から歌声(テレビで歌番組を視ているらしい)が聞こえた時は微妙な気分になったが、無理強いはいできない。住民がインタビューに同意してもまだ安心できない。政府職員がインタビューの場にも同行することがあり、住民が気兼ねなく話すには、彼らに席を外してもらおう方が望ましい。しかし、「結果は後でまとめて説明するから」と説得しても彼らはなかなか受け入れない。インタビューが無事始まっても、今度は現地コンサルタントが住民の話をわずかしか通訳しない。「世間話だから」という現地コンサルタントに「念のために通訳して」と食い下がる。本当に世間話の時もあれば、事業に関する貴重な情報(見方によっては、文句や悪口)の時もある。インタビュー後、政府職員にインタビュー結果を口頭で伝えるが、機微な話があるときは、誰が話したかわからないよう説明するのに気を遣う。フィールドから戻り、インタビュー結果をまとめるともう夜も遅い。情報収集で右往左往した一日を振り返り、ああすべきだった、こうすべきだった、と反省する。

ODA 事業のフーズビリティ調査で、費用便益分析に

従事する時にも「もやもや」が待っている。費用便益分析では評価対象事業の内部収益率を算出し、事業実施の是非を判断する。自分はエネルギー分野の調査を引き受けることが多く、現地の公社職員と次のようなやり取りを交わすことになる。

(小林)「向こう 10 年くらいの燃料供給計画をもらえないか?」→(先方)「そこまで長期の計画はない」

(小林)「足元の借入コストを知りたい」→(先方)「その情報は報告書で言及してもらいたくない」

(小林)「もっと新しい財務諸表がほしい」→(先方)「監査が未完了、その年度以降は変更される可能性がある」

集められる情報には様々な制約が伴い、費用便益分析はすんなりとは進まない。許される範囲の創意工夫や妥協はどこまでか? 制約はどのように記載すれば適正か? 制約の中でどうやって適切な判断を下すか? と幾つものクエスチョンマークを抱えながら、分析を進めることになる。

「もやもや」は情報収集や分析の時だけではなく、報告書を作成する時にもやってくる。評価者と事業関係者が価値判断に使う「ものさし」は同じではない。特に事業関係者が「これはいいプロジェクトだ」と主張する時ほど両者の「ものさし」に大きな違いがあることが多く、早い段階から事業関係者との対話が欠かせない。合意形成がうまくいけば、事業関係者も評価結果に関心を持つ。しかし、対話は重要である一方、評価結果に責任を持つ評価者として譲れない時もある。独善と独立の境目はどこか? どうにも意見が集約できず、事業関係者が報告書にコメントをつけることもある。長かった対話の終わりに、ほっとするが、「もっと粘るべきだったかも」との後悔も残る。

「もやもや」に回答をみつけるべく、日本評価学会「評価倫理ガイドライン」の策定に関わったのは十数年前のことである。そして、評価に携わる様々な人たちとの対話を通じて「もやもや」が自分だけのものではないことに気が付いた。評価の現場では、評価のあるべき姿、つま

り評価倫理に向き合う機会は多いと痛感する。「評価倫理ガイドライン」は理事会承認から十年目の節目を迎え、その改定も現在検討されている。評価倫理・スタンダード分科会の代表として、一人でも多くの人の「もやもや」に応える改定にできればと思う。

Ⅶ 編集後記

日本評価学会報(ニューズレター)第4号をお届けします。今号の内容も盛り沢山です。齊藤副会長をはじめ、多くの方々に御寄稿いただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。

思い起こせば、学会報(ニューズレター)の創刊号は、およそ1年前の2021年10月でした。結果として、この1年の間に4回発行することができたこととなります。

当初、出版・広報委員会では、学会としての広報戦略は今後いかにあるべきかから議論をはじめ、学会ホームページ改訂の方向性やメーリングリストのあり方など、ときには激論を交わしました。そして、新たな取組として、学会報を発行することとし、編集者は出版・広報委員会のメンバーが輪番で担当することになりました。

なお、本号の編集は私が担当いたしました。今期で学会の理事を退任することもあり、これが置き土産となります。

次号からは、新たな組織体制のもと、学会報が編纂されることとなりますが、学会報に掲載したい事項がございましたら、出版・広報委員までご相談いただくと幸いです。

今後とも、よろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

高崎経済大学 佐藤 徹
(日本評価学会理事 出版・広報委員)